『広島平和科学』18（1995） pp. 131－143 ISSN0386－3565
Hiroshima Peace Science 18（1995）

少数民族集団と国境

松尾 雅嗣
広島大学平和科学研究センター

National Minorities and State Border: A Typology

Masatsugu MATSUO
Institute for Peace Science, Hiroshima University

Summary

Most, if not all, ethnic conflicts are fought within the state borders. The proposition seems a truism. However, it reveals certain important aspects of ethnic conflicts because many ethnic conflicts pose a sereious problems of the legitimacy of the extant framework of the sovereign state to which the notion of territoriality is one of the crucial component. Thus, the relationship between the habitat variously referred to as territory, homeland, mother land, and so on, on the one hand, and the boundary of the state in question on the other is a very important issue to consider.

The present paper is an attempt to establish typical patterns of this relationship.

1　問題提起

「民族」の定義は多岐にわたり，「エスニック集団」等との概念的な区別の試みも多いが，ここでは類似の概念を差し当たり同義と見なし「民族」という用語を用いることにする。「民族」をこのような定義するとき，民族問題，民族紛争の原因のひとつは，民族と国家あるいは政治体が一致しないことに求められよう。民族主義，即ちクプチャン（Kupchan 1995: 4）が，「市民的ナショナリズム」と区別する意味での「エスニック・ナショナリズム」が「民族と国家の一致を求めること」を最も重要な特質とすると主張されるのはこの証である（Gellner 1983: 1, Kupchan 1995: 1 など）。この意味で，民族の境界，正確に言えば民族の居住地の境界と国家の境界の不一致は民族問題，民族紛争，民族主義の問題を理解する際にきわめて大きな意味を有する。しかしながら，従来民族の境界と国家の境界の不一致の実態に関しては，本格的な分析はなされてこなかったと言えよう。本稿は，この問題の重要性に鑑み，民族の境界と国家の境界の不一致の実態を明らかにする前提として，その類型化を試みるものである。

このような試みとしては，言語に焦点を当てたマッキーの試み（Mackey 1988: 26-27）がある。本稿における類型化もマッキーの類型化に示唆されるところが多いが，マッキーの場合，類型化の前提と基準が必ずしも明示されないことと，包括的な分類を試みたものではなく，典型的な事例の幾つかを説明するための枠組を提供することを意図することの二点に問題が残る。本稿ではこのような問題を克服した包括的な類型化を試みる。

2　前提と基準

本稿では，国家の内部に少なくともふたつの民族集団，即ち国家の政治経済社会そして文化において支配的なひとつ以上の民族集団と，ひとつ以上の従属的な民族集団が存在する場合を扱う。一般に前者は多数派集団であり，後者は少数派であるが，ここでは国内の相対的人口規模は論じない。また，現実には，スイス，ベルギーなどほぼ対等な複数の民族集団が存在する場合もあるが，これについても原則とし

て論じない。さらに民族と国境の関係を論ずるとするならば，民族の境界と国家の境界が一致する事例，例えば，アイスランド，ポルトガル，多くの日本人の意識における日本なども扱うべきであるが本稿では論じない。国内における支配的あるいは優位にある民族と，従属的あるいは劣位にある民族の存在を前提として，居住地と権力という基準によって後者と国境との関係を類型化するのが本論の目的である。

民族と国境の一致，不一致を検討するに際して最も重要な要因と考えられるのが，現在の居住地である。現住地に関して最も重要な基準は，現住地が国境によって分断されているか否かという基準である。これを第一の基準とする。

居住地が国境により分断されている事例は，さらに居住地が隣接しているか否かという基準によって，下位区分される。これが第二の基準である。民族の居住地を国境線が横切る場合と，移民，強制移住などによって，別の新たな居住地ができる場合を区別する必要があるからである。この基準はまた，些か便宜的ではあるが，離散民族とそうでない民族の区分にも使用される。

第三の基準として，居住地が国境によって分断されている場合について，隣接するか否かに関わらず，国境によって分断された複数の居住地の少なくともひとつで，支配的地位を占めているか否かも区別される。即ち，われわれの定義からして現住地では従属的である民族が，他の国家内で支配的であるか否かも民族と国境の関係を規定するひとつの基準である。コナー（Connor 1987: 211）の言う如く，民族が「祖先の共有の神話を特質とする最大の人間集団」であり，「歴史的事実との符合は問題ではない」（Connor 1987: 211）にしても，民族発祥の地という概念はそれぞれの民族にとってきわめて大きな意味をもつ。そしてまた，大多数の民族にとって，現実にはともかく理想としては，故地とは自らが支配的である地域であるはずである。それゆえ，隣接した居住地が分断された場合，われわれの対象とする従属的民族にこの意味での故地があるか否かはこの民族の行動を理解する上で重要な要因となるはずである。

上述の如く，本稿では，現住地で従属的である民族を対象とする。しかし，例外的には上述の故地のみならず，現住地でも政治経済等における支配的集団である場合もありうる。幾つかの事例を区別するために，現住地で支配的であるか否かを第四の補助的な基準として用いる。

以上四個の基準によって以下の六つの基本的類型を得る。

孤立
分断
離散
溢出
重複
流出

上述の基準とこれらの類型の関係を表1に示す。以下これらの類型とその実例を検討する。

表1　従属的民族と国境

＋：基準妥当、－：基準妥当せず
斜線：基準は適用できない

	現住地国境で分断	現住地隣接	支配的地域他にあり	現住地で支配的
孤　立	－			－
分　断	＋	＋		－
溢　出	＋	＋	＋	－
重　複	＋	＋	＋	＋
流　出	＋	－	－（＋）	－（＋）
離　散	＋	－		－

2　孤立

後掲，図（1）の「孤立」は，少数集団が，国家，社会，あるいは地域に完全に包摂されており，他地域に存在しない場合を言う。世界の多数の少数民族がこの類型に妥当する。

このような傾向は，先住民族に特に著しく，ソ連の公式統計でも，1970年調査で母語人口1000人を割る言語集団を10以上数えることができる（Comrie 1981：281）。これらの民族の多くは，「北方少数民族」と呼ばれるシベリアの先住民であり，明らかな孤立の事例である。

また西欧についても，ブルトン人，ソルブ人，カシューブ人，ウェールズ人，スコットランド人，ガリシア人，フリウリ人，アルザス人，コルシカ人，サルディニア人などがこれに当る。さらに，スイスのロマンシュ語や，フリウリ語とともにレト・ロマン（シュ）語に属するラディン（Ladin）語を使用するする集団は，言語人口3万ないし3万5千人の小集団であり（アシュワース 1990：287），イタリアの南チロルの少数集団であるドイツ語系集団の中に包摂される特異な少数民族＝言語集団である（Anderson 1990：171）。

3　分断

図（2）の「分断」は，ひとつの民族集団が国境により分断され，境界のいずれの側においても従属的集団である場合を言う。「分断」は，境界線のいずれにおいても支配的集団でない点で「溢出」，「重複」と，集団の居住地が地理的に隣接している点で「離散」と，またこのふたつの点で「移民」とそれぞれ異なる。

具体的事例としては，スペインーフランス国境により分断されたバスク人，カタルーニャ人がよく知られた例である。但し，スペイン側では，バスク，カタルーニャともに自治共同体として言語の使用権を含む自治権を獲得しており，現在では次の「溢出」に近くなっている。

民族を分断する境界線はひとつとは限らない。多くの国境にまたがり，そのいずれにおいても支配的でない集団も多い。ヨーロッパの例では，サーミ人やフリジア

人がその例である。大集団としては，推定1千万以上（Minority Rights Group 1989: 184）と言われる北アフリカのベルベル人もモロッコ，アルジェリア，チュニジアに分断された集団である。

このように多くの国境によって分断された民族として最大のものは，湾岸戦争後よく知られるようになったクルド人であろう。クルディスタンと呼ばれるその居住地域はトルコ，ソ連，イラン，イラク，シリアの5ヵ国にわたり，最低でも人口1千万を数えると推定されている（Boustani and Fargues 1990: 35)。

4 溢出

図（3）の「溢出」は，支配的民族が，国境を越えて隣接地域へ溢れ出る，あるいは国境線などの境界の変更により，支配的地位を有する境界の外側に取り残されることにより生ずる。境界の両側に隣接し，地位が異なることが特徴である。大規模な歴史的な事例としては，戦間期東欧における2000万人を超える国外居住集団（木戸 1987: 258）の大半がこの事例であると言えよう。近いところでは，中国吉林省の延辺朝鮮族自治州を中心とする東北3省の朝鮮人約200万人もその例である（清水 1991，宮塚 1992)。

今日の事例で言えば，ルーマニア領となっているトランシルヴァニアのハンガリー人問題，ユーゴスラヴィアからの分離独立を果たしたクロアチア内部のセルビア人問題，セルビア領内コソボやマケドニアのアルバニア人，ナゴルノ・カラバフのアルメニア人などがそれである。また，今日旧ソ連全体で約2500万人のロシア人がロシア連邦以外の共和国に取り残されているとされるが（Limberg 1994: 65)，取り残されたロシア人問題がバルト3国をはじめ旧ソ連における最大の民族問題となっている。ヨーロッパの外では，スリランカの紛争も同様の事例と看做すことができよう。

より微視的に見ればこのような事例は枚挙に暇がない。例えば，オーストリアのユーゴ国境ケルンテン（Carinthia）のスロヴェニア人やブルゲンラント（Burgenland）のクロアチア人はよく知られた例である（Eichinger and Jodbauer 1987: 140, Fischer 1986: 188-189)。

錯綜した事例としては，ドイツーデンマーク国境のデンマーク側にドイツ語少数集団が，ドイツ側にデンマーク語少数集団が存在するといういわば「相補的な」（Anderson 1990: 170）溢出関係も存在する。あるいはスエーデンにおけるフィンランド人と（Wande 1984）フィンランドにおけるスエーデン人（Reuter1990, Tandefelt 1992）の関係も同様である。

国境の内側に支配的民族集団が存在し，国境の外側にそれに隣接した従属的な同一民族集団が存在するという「溢出」状況は，しばしば国境紛争や領土紛争の原因，口実となる。所謂領土回復運動がそれである。歴史的な例で言えば，ナチス・ドイツのズデーテン併合がそうであった。周知の如く，1918年オーストリア・ハンガリー帝国の崩壊によって独立を達成したチェコスロヴァキアには総人口の4分の1約300万人のドイツ人が居住し，ドイツあるいはオーストリア国境に近い地域とくにズデーテン地方に集中的に居住していた（木戸 1987: 264-265)。

5　重複

図（4）の「重複」は，「溢出」の幸福な一変種と考えられる。複数の民族集団が自己の国境を越え，隣接地域へ溢出する状況を言う。溢出先では，支配的集団ともなりうるが，複数の支配的集団の併存を特徴とする。典型的な例としては，スイス，ベルギーなどが挙げられよう。この場合，現実には連邦制のような形で複数民族集団の併存を図っているのが通例である。

6　流出

図（5）の「流出」は，隣接しない地域も含めた他地域への自発的，強制的移住の結果，従属的集団となる場合を言う。「分断」とは人口移動を伴う点，地域的隣接性を一般にもたない点で異なる。また，前項の溢出と判別の困難な場合もあるが，同様に，人口移動という要因が重要であることと，地域的隣接性を差し当たり区別の規準としておく。また，「溢出」においては，国境のいずれかにおいて当該民族集団が支配的であるが，「流出」の場合はこの条件は必要ではない。ヨーロッパ人

の新大陸，オセアニアへの移民という例外はあるが，今日では特に流出先では従属的であるのが普通である。

流出の形態は幾つかある。最も端的な例は，移民である。ただ現実には，古くはドイツ騎士団のような植民や征服と明確に区別されない場合も存在する。南米スペイン系，オーストラリア，ニュージーランドのイギリス系のように，支配的地位を獲得した場合もある。また，自発性，強制の度合いは多様である。

流出の第二の形態は，難民である。難民は，1993年現在世界全体で4200万人，うち2600万人が民族紛争と民族的抑圧による難民であるとされている（Gurr and Harff 1994: 7-8)。

流出の第三の形態は追放あるいは強制移住である。名目的にはともかく，実態においては移民と明確に区別できない場合もありうる。歴史上明白にして悲惨な事例も少なくない。そのひとつはトルコによるアルメニア人の名目は追放，実態は大虐殺である。他のひとつは，第二次世界大戦末期に行なわれたソ連諸民族の強制移住であろう。この強制移住は，実際には1937年の「対日協力」名目によるウラジオストックを中心に居住していた朝鮮人の中央アジアウズベク共和国とカザフ共和国への強制移住が最初であるとされる。1979年現在，両共和国にそれぞれ約16万人，9万人の朝鮮人がいるとされる（MRG 1989: 151)。問題の強制移住は，第二次世界大戦期，「対敵協力民族」（カレール＝ダンコース 1981: 339）として，7つの民族（ヴォルガ・ドイツ，クリミア・タタール，チェチェン，イングーシ，カラチャイ，バルカル，カルムイク）の少なくとも百万人が強制的に居住地から中央アジアやシベリアに移住させられたものである（カレール＝ダンコース 1981: 74)。今日，彼らの名誉は回復され，幾つかの民族は故郷に帰還することも許されたが，クリミア・タタール人とヴォルガ・ドイツ人は依然として旧地に帰還することは許されていない。

ヴォルガ・ドイツ人の問題は，「流出」とまったく逆の形態「帰還」の問題でもある。しかも，二重の意味での帰還の問題である。ひとつは，ヴォルガ・ドイツ人の旧ソ連における故地，ボルガ・ドイツ自治共和国の故地への帰還の問題である。他のひとつは，ボルガ・ドイツ人を含めた旧ソ連・東欧のドイツ系住民の故地ドイツへの帰還の問題である。1989年の国勢調査によれば，ソ連のドイツ人は約200万人（Smith ed 1990: 363）であり，旧ソ連・東欧全体では，このようなドイツ系

住民（Aussiedler）は，少なく見積もって300万人と言われる（宮島 1991：78)。

7　離散

図（6）の「離散」は，地理的に離散した従属的民族集団の事例である。国境により分断され，いずれの国家においても従属的である。「分断」の場合とは，居住地域が離散している点で異なる。典型的な例としては，ヨーロッパにおけるロマ人とユダヤ人が上げられよう。但し，ユダヤ人の場合，1948年のイスラエル建国により厳密な意味での「離散」とは言い難い状況も現出している。

結び

本稿では，権力，居住地，国境という3つの基準により，主として従属的民族の置かれた状況の類型化を試みた。民族集団が置かれた現実の状況は，このような類型よりはるかに複雑であることは論を俟たない。上述の類型はあくまで粗描であり，概念，用語，定義いずれもさらに精緻化する必要があることは言うまでもない。民族問題，民族紛争，民族主義のより深い理解のためには，民族の置かれた状況の一層の理解が必要であるが，本稿で用いた3つの基準がこれを記述する変数として必要にして十分であるか否かはさらに検討が必要である。そしてまた，本稿ののような試みが，現実の問題の理解と，ひいては解決にどの程度寄与しうるかも今後の検討課題である。

凡例：A，B，C，...　　支配的民族
　　a，b，c，...　　従属的民族
　　═══　　国境

（以下の図においても同様）

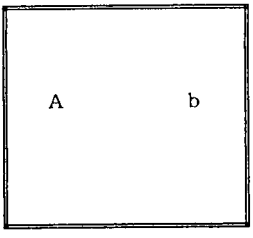

図1　孤立

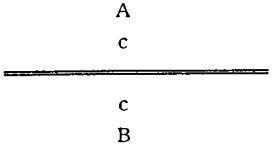

図2　分断

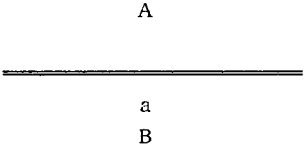

図3　溢出

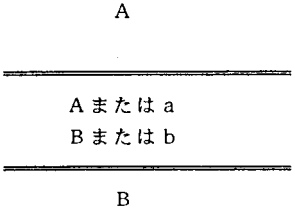

図4　重複

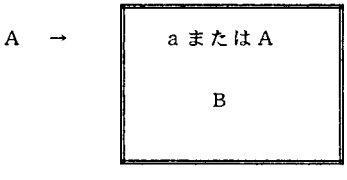

図5　流出

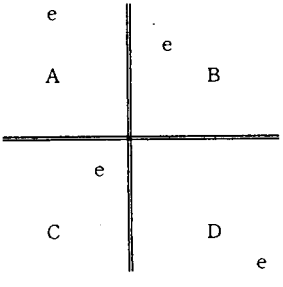

図6　離散（ディアスポラ）

引用文献

Anderson, Alan B. (1990), "Ethno-natinalism and Regional Autonomy in Canada and Western Europe," Ralph R. Premdas et al (eds) (1990), *Secessionist Movements in Comparative Perspective,* London: Pinter, 168-180

アシュワース，ジョージナ（編）（1990）『世界の少数民族を知る辞典』，東京：明石書店

Boustani, Rafic and Philippe Fargues (1990), *The Atlas of the Arab World: Geopolitics and Society,* New York: Facts on File

カレール＝ダンコース，エレーヌ（高橋武智訳）（1981），『崩壊した帝国：ソ連における諸民族の反乱』，東京：新評論

コバン，アルフレッド（栄田卓弘訳）（1976）『民族国家と民族自決』，東京：早稲田大学出版部

Comrie, Bernard (1981), *The Languages of the Soviet Union,* Cambridge: Cambridge University Press

Connor, Walker (1987), "Ethnonationalism," Myron Weiner and Samuel P. Huntington (eds) (1987), *Understanding Political Development: An Analytic Study,* Boston: Little, Brown and Company, 196-220

Eichinger, Ludwig M. and Ralph Jodbauer (1987), "On Comparing Multilingual Societies: The Linguistic Situation of the Slavic Minorities in the Republic of Austria," Mac Eoin et al (eds) (1987) *Third International Conference on Minority Languages: General Papers,* Clevedon: Multilingual Matters, 133-145

Fischer, Roland (1986), "The Bilingual School of the Slovenes in Austria," *Journal of Multilingual and Multicultural Development,* 7(2/3), 187-197

Gellner, Ernest (1983), *Nations and Nationalism,* Oxford: Basil Blackwell

Gurr, Ted Robert and Barbara Harff (1994), *Ethnic Conflict in World Politics,* Boulder: Westview

木戸蓊（1987）「東ヨーロッパ － 政治変動と民族問題」，江口朴郎（編）（1987）『民族の世界史15 現代世界と民族』，東京：山川出版社，248-278

Kupchan, Charles A. (1995), "Introduction: Nationalism Resurgent," Kupchan (ed) (1995), *Nationalism and Nationalities in the New Europe,* Ithaca: Cornell University Press, 1-14

Limberg, Wayne P. (1994), "World Upside Down: Ethnic Conflict in the Former Soviet Union," W. Raymond Duncan & G. Paul Holman, Jr. (eds) (1994), *Ethnic Nationalism and Regional Conflict: The Former Soviet Union and Yugoslavia,* Boulder: Westview, 53-76

Mackey, William F. (1988), "Geolinguistic: Its Scope and Principles," Colin H. Williams (ed) (1988), *Language in Geographic Context,* Clevedon: Multilingual Matters, 20－46

Minority Rights Group (1989), *World Directory of Minorities,* Essex: Longman

宮島喬（1991）「"国境なきヨーロッパ"と移民労働者」，宮島・梶田（編）（1991），『統合と分化のなかのヨーロッパ』，東京：有信堂高文社，53-83

宮塚利雄（1992）「延辺朝鮮族自治州と豆満江流域を訊ねて」，『海外事情』，40(11)（1992），66-80

Reuter, Mikael (1990, 1981), "The Status of Swedish in Finland in Theory and Practice," Einar

Haugen et al (eds) (1990), *Minority Languages Today*, Edingburgh: Edingburgh University Press, 130-143

清水登（1991）「延辺朝鮮族自治州における二重言語制度　－　民族共存のための苦闘」，平成２年度文部省科学研究費補助金総合Ｂ報告書（研究代表者渋谷武）『環日本海における国際環境の形成と変容に関する予備的研究』，299-312

Smith, Graham (ed) (1990), *The Nationalities Question in the Soviet Union*, London: Longman

Tandefelt, Marika (1992), "Some Linguistic Consequences of the Shift from Swedish to Finnish in Finland," Willem Fase et al (eds) (1992), *Maintenacne and Loss of Minority Languages*, Amsterdam: Benjamins, 149-168

Wande, Erling (1984), "Two Finnish Minorities in Sweden," *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 5(3/4), 225-241